令和５年度　授業改善実践研究校報告書　真亀小学校

１　学校の課題

令和４年度全国学力・学習状況調査の結果は本市や国の平均より低く、上位と下位の２極化の傾向がみられる。本校の児童の実態としては、自己肯定感が低く、あまり意欲的に学習しないまま学年が進んでいる児童がいる。学習以外の場でも、自分の考えや思いを言葉に置きかえて相手に伝えることができず、トラブルに発展してしまったり、自己表現ができずに孤立してしまったりする児童もいる。

本校の課題を解消するために、児童が能動的に学ぶ授業づくり、自らの思いや考えを言語化することで自己の認識を明確にしたり、友達と共有したりするための手立て、その効果を高めるための ICT の活用、そして、教師自身が児童の思いや考えを見取る視点を広げることが必要であると考える。

２　研究主題

自他の「考え」や「思い」を大切にし、表現できる児童の育成
～図画工作科における ICT を効果的に活用した鑑賞教育を通して、
言語の習得をめざす授業づくり～

３　取組内容

【授業づくり】

本校の課題に対して図画工作科の研究を通して、自他の「考え」や「思い」を大切にし、表現する力を育むことができると考え、授業研究に取り組んだ。

（１）　児童が能動的に学ぶ授業づくり
- ①　題材や時間のねらいと、それに伴う児童の具体的な姿を教師が明確にし、児童の一つ一つのつぶやきや行動、記述や反応を見取る。
- ②　「なりきる」や「比べる」、「探す」、「触れる」、「遊ぶ」活動の中で、対象と一体となって鑑賞の活動を行い、実感を伴った知識を身に付けることのできる教材の開発をする。
- ③　鑑賞する対象との魅力ある出会い方を設定する。
- ④　複数の対象から、自らの興味関心に応じて鑑賞する対象を自己決定できる場面を設定する。
- ⑤　対話を中心とした学習の場を設定する。

（２）　思いや考えを認識し、言語化するための手立て
- ①　本時のねらいに合わせた話し合い活動用のワークシートや拡大図等の準備をする。
- ②　「アート言葉」の活用をする。

（３）　ＩＣＴの効果的な活用
- ①　作品の細部や質感を確認するために鑑賞対象をタブレット端末で共有する。
- ②　作品の世界観に入り込むために、ミラーリングし、覗き込む視点等を映像で共有する。
- ③　タブレット端末上で作品画像に気付き等を書き込む。

（４）教師の児童の思いや考えの見取り
- ①　児童に身に付けさせたい力を明確にし、児童の具体的な姿を想定して評価規準を設定する。
- ②　研修等で実技を取り入れ、教師の体験的な学びの場を設定することで、鑑賞の活動における思考の流れを認識する。

【授業実践】

〔第１学年〕

題材名：え？えのなかに・・・。

目　標：造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて、感じ取ったり考えたりして、自分の見方や感じ方を広げることができる。

身近な絵本の絵を題材に、好きな絵を選んで鑑賞した。絵の中に隠された形や色、動物などを見付け、友達と対話することを通して、絵のよさや面白さを味わった。

鑑賞対象：シマウマだけどウサギ・ヒョウなのにテントウムシ（くもん出版）

〔第２学年〕
題材名：ともだちハウス
目　標：お互いの家にお出かけする活動を通して、感じ取ったり考えたりしたことを友達と話し合いながら、自分の見方や考え方を広げることができる。

題材の導入で、身の回りから気に入った自然物を探す鑑賞活動を行った。見付けた宝物は「ともだち」として擬人化し、友達の住むお家を思い思いに空き箱等の材料を使って表現した。製作途中では、他の児童の製作途中のお家に、「ともだち」になりきってお出かけした。なりきって遊ぶ活動の中で、話し合いながら表現のよさや面白さについて、色や形、手触りや仕組みなどをもとに気付く相互鑑賞をした。

鑑賞対象：児童が自ら見付けてきたお気に入りの葉や小石（「ともだち」）

〔第３学年〕
題材名：にこにこアートカード～友達のお気に入りポイントはどこだ？～
目　標：自分や友達が作ったアートカードを見合うことを通して、よさや面白さ、感じ方の違いを見付けることができる。

広島市現代美術館への校外学習で、お気に入りの作品をお気に入りの角度から撮影し、その写真をアートカードにした。選んだ理由を伝え合いながら、思い思いの角度から撮影した友達の作品を鑑賞し合い、自分が付けた題名を基に、よさや面白さを見付け合った。

鑑賞対象：広島市現代美術館で鑑賞した作品

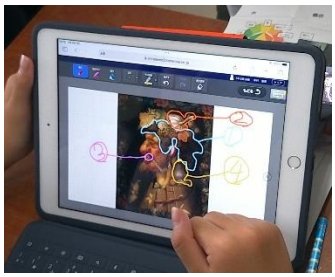
〔第４学年〕
題材名：　ポーズのひみつ
目　標：こんきょをみつけて　人物のせりふを考えることができる。

絵の中のポーズや色遣いを根拠に、人物の気持ちやストーリーを想像させ、どんな場面なのか、どんな気持ちなのかを想像したことを話し合い、絵のよさや面白さを見付け合った。

鑑賞対象：罪（土田麦僊）・ピアノを弾く二人の少女（ルノワール）・ジャングルジム（中土居　正記）校内展示作品

〔第５学年〕
題材名：よく見てアート
目　標：作品の鑑賞を通して、根拠を示しながら形や色などの造形的な特徴を基に自分の見方や感じ方を深めることができる。

4 枚の絵から 1 枚を選び、その作品が表す季節を想像した。作品に描かれている要素に着目し、どうしてその季節になるのか根拠を探した。タブレットを使い手元でズームをしたり、気付きを書き込みしたりして、じっくり見た後、グループで拡大紙を使って思いや考えを共有した。



鑑賞対象：四季（ジュゼッペ・アルチンボルド）

〔第６学年〕
題材名：つないでみたら
目　標：形・色・構成などを基に、造形的なよさや表現の特徴について感じ取ったり考えたりして、自分の見方や感じ方を深めることができる。

作品の中の人物になりきり、せりふを考えて紹介したり、3 ヒントクイズをつくったりし、どの作品を選んだのかクイズを出し合った。その後、全て一人の画家が制作した作品であることを知るとともに、友達と話し合いながら、表し方の変化に着目して作品を比較分類した。

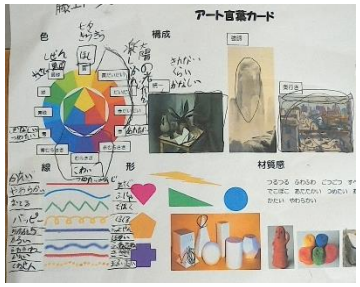
鑑賞対象：人物画（パブロ・ピカソ）

【アート言葉の活用】
内容：自分の思いをもつための手立てとして年間を通して「アート言葉」の活用に取り組んだ。「アート言葉」とは、自分たちの身の回りの物や経験から形や色などを表す言葉を集め、共有したものである。児童が自ら出し増やした言葉が、鑑賞するときや振り返りを行うときに活用できるよう教室に掲示した。

【校内環境】
- 生け花の地域施設での展示（児童がつくった花器にて）
- 校内真亀美術館にて、縦割り班での相互作品鑑賞

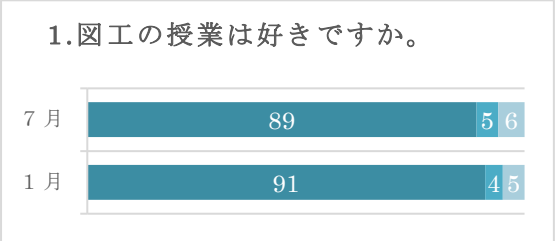
【外部機関との連携】
- 広島市現代美術館との連携（児童によるアートカードの作成）
- ひろしま美術館との連携（１・２年生の校外学習）
- オーストラリアの児童との交流

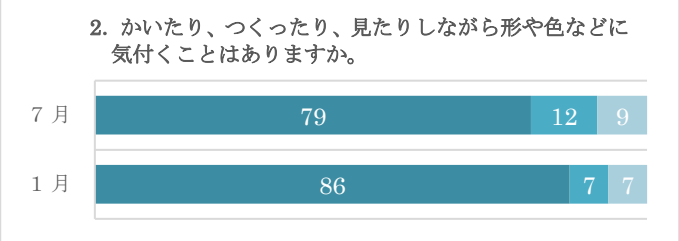
（共通のテーマで表現した児童作品の相互鑑賞・Web ミーティング）

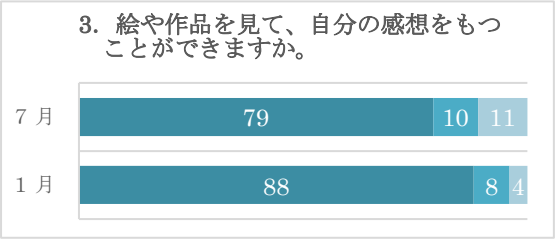


4　検証結果

1　児童アンケート（ ■はい ■どちらでもない ■いいえ ）

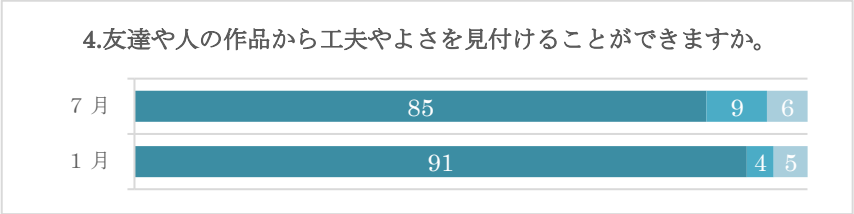




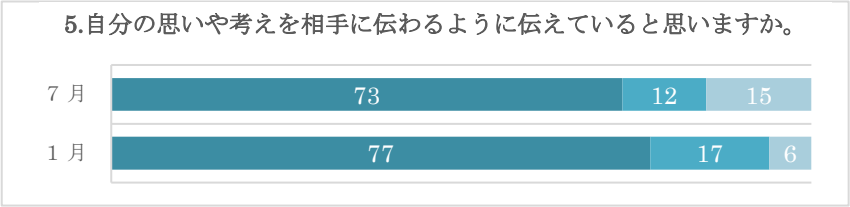


２の、「かいたり、つくったり、見たりしながら形や色などに気付くことはありますか。」の質問では、肯定的回答が７％増加した。

３の、「絵や作品を見て、自分の感想をもつことができますか。」の質問では、肯定的回答が９％増加した。



４の「友達や人の作品から工夫やよさを見付けることができますか。」の質問では、肯定的回答が６％増えた。



５の「自分の思いや考えを相手に伝わるように伝えていると思いますか。」の質問では、否定的回答が９％減った。

２　教師アンケート（自由記述）

【７月】
- 対話活動や思ったことの記述では、「すごい」「上手」という表現しかなく、語彙が少ない。（低学年）
- 作品を見て感想を持つことはできても、どこからそう思うのか、根拠を述べて書くことができるのは約３割程度の児童のみである。（中学年）
- 根拠を挙げて思いや考え、気付き、感想等を書くことができる児童は５割ほどいる。書くことができる割合を増やしていきたい。また、発言の中でも、より高めていきたい。（高学年）

【１月】
- 色や形を身近なものから見付け、そこから想像した言葉を使って表現したり、相手に「どうして？」と聞き返したりすることができるようになってきた。今後、互いの発言から学びを深めることができるように、鑑賞の視点を共有していく。（低学年）
- ほとんどの児童が思ったこと、感じたことの記述が根拠を挙げてできるようになってきた。「書く」ことに課題がある児童も、個別に聞くと自分の思ったことや感じたことの根拠があげられる。今後は、その根拠について、友達と比較したり、違いから相手の気持ちを考えたりする活動を取り入れ、協働的な学びがより適切に行われるようにしていきたい。（中学年）
- ほとんど全ての児童が、自分が思ったことや感じたことの根拠を挙げて記述や発表ができるようになった。しかし、全体での対話活動については教師側が主体となってつないでいる。児童が自分自身でお互いの意見に反応したり、意見をつないだりしようとする様子はみられるので、さらに深めていきたい。（高学年）

５　研究の成果と課題

１　研究成果

⑴　児童が能動的に学ぶ授業づくり

①　題材や本時で身に付けさせたい力を児童の具体的な姿をもって明らかにすることで、児童の一つ一つのつぶやきや行動、記述や反応を見取り、評価する声掛けを行うことができた。教師からのねらいに即した肯定的な声掛けは、児童の能動的に学びに取り組む姿につながった。

②　「なりきる」「比べる」「探す」「触れる」「遊ぶ」といった対象を一体化して捉える鑑賞の活動によって、楽しみながら実感を伴った知識の習得を行うことができた。

③　児童にとって親しみのもてる発達段階に応じた作品（１・４・５・６年生）や、自ら見付けてきた自然物（２年生）、日常の中で触れ合ってきた校内掲示作品（４年生）、美術館の校外学習において気に入った作品（３年生）を取り扱い、驚きや自らの体験を伴った対象との出会いは、児童の鑑賞への意欲を高め、思いや考えを引き出す対話を自然に引き出すことにつながった。

④　どの学年においても、複数の対象の中から、自らの興味関心に応じて鑑賞する対象を選択し、自己決定できる学習展開を行った。興味関心のある対象だからこそ児童は細かい部分に至るまで対象を鑑賞し、ペアやグループでの対話での新たな気付きや学びの深まりにつながった。

⑤　魅力ある対象との出会いができた題材では、自然と対話的活動が広がった。

⑵　思いや考えを認識し、言語化するための手立て

①　本時のねらいに合わせたワークシートを準備することで、児童は鑑賞するための視点を共有することができた。また、ＩＣＴ機器や拡大図等に書き込みをしながら気付きを共有することで、思いや考えを認識しやすくなった。

②　「アート言葉」の活用は、児童の思いや考えを言語化するヒントとなった。

⑶　ＩＣＴの効果的な活用

ＩＣＴを効果的に活用することで、児童の学びが深まった。特に、鑑賞の活動では、対象の細部や質感の確認や気付きの書き込み、覗き込むなどの一体的に捉える視点の共有において非常に効果的であった。

⑷　教師の児童の思いや考えの見取り

①　題材を通して身に着けさせたい力から児童の具体的な姿を明らかにして、学習展開を考えると、児童の一つ一つの言動から思いや考えを見取り、評価することができるようになった。

②　実際に体験をすることで、児童の思考の流れの一例を把握することができ、学習展開を考える上で必要な取組と必要でない取組を整理することができた。

⑸　図画工作科の研究を通して

①　児童の自己肯定感の高まりに関して

・　「いいね。」「なるほど。」など、肯定的反応が多くなった。それにより、良い気持ちで話せる児童が増え、自分の思いを伝えやすくなっている。

②　学習に対しての意欲に関して

・　「どうして？」と問い返したり、肯定的反応をしながら聞いたりすることができるようになり、友達の見方のよさや面白さを感じられるようになってきている。

③　自分の考えや思いを伝える力に関して

・　作品の中から根拠を挙げて自分の考えや思いを表すことができる児童が増えてきた。

・　児童とともに日常生活の中からアート言葉を育むことは、思いや考えを表現する際の、学級全体での共通した視点となる。また、言語化することが苦手な児童へのヒントとなる。

・　同じ対象であっても、それぞれが見付けた根拠から違う思いや考えが出ることで、児童の見方が広がったり深まったりした。

④　他教科とのつながりに関して

・　根拠を基にして鑑賞する図画工作科の学習は、他のどの教科にも通ずる考え方であった。例えば、国語科で言葉を基に叙述を読み取ること、それを根拠に自分の考えにつなげて書くこと、算数科で式や図を基に説明することなど、こうした考え方を図画工作科の鑑賞の活動では、楽しみながら習得することができる。作者やタイトルを暗記するような教え込みではなく、対象と一体となり実感を伴った学習の過程の大切さについて、実感を伴って理解することができた。

２　研究課題

自らの思いや考えに気付き、言語化することに取り組んだことには成果を感じているが、友達との対話の中で思いや考えを深めたり広めたりすることは、まだ希薄である。支持的風土の醸成された学級の中で、教師を含めた全員が鑑賞の視点を共有し、自分の見方や感じ方を友達の見方や感じ方と比べながら聞き、その上でお互いの思いを伝い合える力を育てていきたい。